メイ・ヘヴンはベーカー街にて空を舞う

黒とわ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「機械と人が寄り添いあう素晴らしい時代」

テレビに映るミュージシャンがそう叫ぶと皆が手を叩き、素晴らしい時代だと謳った。

しかし、その実。人は機械を戦争や自分の欲求を満たすことにしか使えない愚鈍な衆だったのだ。人は己を神と呼んだ。

そんな腐った時代の中、世界のどこかに居る本当の神様は有意義か無意味か、機械の人形に一つの魂を宿した。

……私の生活は、廃棄所にごろんと寝そべりただ「人間になりたい」と心から願う毎日だ。……思えばこの願いが芽生えてから幾つ年を重ねただろう。

私は機械だけれども、心を持っている。唯一無二の溢れる詩は何時か、またいつかと願い、灰色の朝日が顔を出す。

そんな何時かの冷たい闇。あの日、彼に出会った。……凍える様な雨を仰ぎ見て流す涙はオイルの味がした。

お久しぶりです。

短めに完結する様に書きます。

暇なときにちょこちょこ書くのが好きなので投稿めちゃ遅いです。毎日書く人凄い。

ゆっくり書いていきますが気に入ってくれたら読んでみてくれると嬉しいです。

目次

無意味な旅 ―― 1
壊れた時計 ―― 7
2人の仕事 ―― 11
蒲公英の一夏 ―― 17
されども、枯れゆく華は美しい ―― 24

無意味な旅

やさしい未来が見たい。
暖かな光に埋もれたい。
ふっくらとした白いパンの様な布団から心地よく目覚め、清らかな文字を書き日々を過ごし、そして週に一度光り輝く星を恋人と望遠鏡で眺めこう話し合うのだ。
「奇麗だね」

……膝に仕込む大きめのスプリング　３５ドル
手首のトルク　１４ドル
瞳のレンズ　８ドル
……私の身体はご主人様が必死で稼いだお金の塊だ。そして今もその荒っぽい手つきで、私の身体がゆっくりと組み上げられて行く。私は何のために作られているのだろう。煙草の臭いがする部屋で私の身体は形作られていった。今まで関係のなかった、別々の場所で買われ、全く違う用途だった鉄の部品達が私を作成していく。
関節の油　３ドル
心臓のポンプ　４０ドル
腰の第一モーター　３０ドル
私は、自分の髪が好きだ。金色に光る線が、まるで実った小麦畑の作物が風に揺れる様子に似ていて、たまらなく愛おしい。だが、私のご主人は髪などは特に興味がないらしい。顔の造形ばかり拘っている。私は間違っているのだろうか。
完成した私は上半身だけのお人形。ただのご主人様の話し相手をするだけの無表情な傀儡。そんな私を見て、ご主人は私を作るのに掛かった費用を叫ぶ。ずうっと昔に自分を捨てた妻と子供の話を私に楽しそうに話し、私の胸に手を入れ弄る。
酒臭い息が顔にかかり、私の顔が少し曇った。彼は、それが許せなかったのだろう。私が自分の身体の中で唯一好きだった金色の髪を

引っ張る。これを機にご主人様は私を、逃げた妻の様に扱うようになった。
８ドルのレンズで作られた瞳に映る私の顔に向かう拳を見て、合成皮でできた瞼をゆっくりと閉じる。
……意思のない物体の神様は、その物体に対して他の人よりいくら多くお金を出したかで決まる。
……２０ドルの破れてしまっている人間の皮膚を再現した合成皮に滴る、雨を見て私はそう思う。
……何時からか、私の住処は塵の山になった。そして私のこれからのご主人様は毎日の様に私の腹の皮を食べにくる鼠になってしまった。
「こんにちわ」
私は毎日の様に鼠に話しかけた。
私の腹皮は上手いのか？　固くはないのか？　どこに住んでいるのか？　兄弟は居るのか？
鼠は一度も答えてはくれなかったが私は案外楽しかった。
彼がどんどん太っていったからだ。
私が生き物の成長する糧の一つとなっているという事実が、何故だか嬉しかった。
ここは臭いは最悪だが、無意味な暴力で体のパーツを破損させるよりは、よっぽど効率的で意味のある行動だ。壊れた機械には相応しい場所なのかもしれない。
……何時しか私を寒さから守るボロボロだった服は腐り落ちてしまった、胸から下はもげて黒いオイルが滴り落ちてしまっている。周りは残飯や塵くずだらけだ。……私は人形からゴミになってしまった。
残飯に群れるカラスは私の目玉を巣材にしようと鋭い嘴で何度も突くが時間の無駄だと知り、今度は私の髪を啄む、一度や二度では解れない素材の紙だが、何度も根気よく突いてくる慈悲のない攻撃は私の人工の頭皮を捲りあげ、自慢の髪は持ち去られてしまった。
体にまとわりつくきつい臭いの残飯にウジは集り、雨をしのげる私

の身体は蠅に利用され雨をしのぐ宿にされてしまう。人口の皮膚は合皮を消化できる強靭な胃袋を持つネズミに齧られ、冷たい鉄の肌が雨に晒される。

人は何かを成すために生きているというが、私が成した事と言えば、体の中にたまったウジの蛹が蠅の成虫になったのを粗悪なガラスの瞳で見守る程度だ。

……まあそれはそれで、私は何かを成した事には変わりない。

しとしと降る雨を剥き出しの肌で受け止め私は、心臓付近のポンプから排出される芯まで冷たくなった息を吐いた。その様子を丁度通りがかり、瞳に写した子供はまるで手足をもいだバッタを捨てるときの様に、薄気味悪く口をゆがめる。

ご主人様に、景気付けと称して私には涙が出る仕様があった事を久しく思い出した。

枯果てた水分を流すパーツは錆びていて、使い物にならないので、黒く溜まったオイルなのか汚物なのか解らない者が頬を伝う。

救われない人は神様という空想の王を信じるらしいが、私にはそれがない。ならば私が信じるものはなんだと問われれば私を殴るご主人か腹を食い破る鼠、という事になるのだろう。

そして、そんなものを必死で信じる私は頭が悪いのだろう。だが、顔を殴られている間にも、お気に入りの髪を乱暴に捕まれている時も私は抵抗しなかった。そうプログラムされているからだ。

これは私が作られたものなのだからだろうか？

……ならば私は、プログラムされたものを崇拝する馬鹿な人形より、自分の在り方で、自分の感情で物事を決められる私を模った唯一の生命体「人間」になりたい。

私の最後に残った、禿げあがった頭の皮膚を食べる鼠を見てそう思う。

星も見えない真っ暗な夜空を、割れた瞳で仰ぎ見て、唇は綻んだ。

……人間。自分で考え、自分で行動できる動物。

その動物と私達、機械人形には何の違いがあるだろう？

「お嬢さん、生きてるかい？」
そんな答えの出ない問答を繰り広げるようになって、気付くと一人の生き物が私の前に立っていた。
真っ黒で高価そうな厚いコートを着て服と同じく黒い帽子を被り雨に濡れぬよう、大きな蝙蝠傘をさしている。
黒い帽子から薄く見える細く蒼い瞳は私を憐れんでいるのか、蔑んでいるのか。
私は、無言で空を見た。この場合空を見るというよりは、この生き物の声を聴いていない振りをした。
何故なら私は醜いからだ。全身の皮は食い荒らされているし、剥き出しになった鉄は雨に侵食されている。遠い昔の話だが子供に朽ちていく枯れ木を見るような目で見られた。
鏡という物が身近に無いので、私の姿を見れないと野次を入れる個も居るかもしれないが、それは間違いで、私の醜い姿は私のすぐ下にたまった泥水を、目で細めてよく見れば写るのだ。
醜くて、髪も無くて、目もひび割れていて、ウジ虫も見捨てるほどに何も生み出せない鈍間で、この世に存在する価値のない私の姿が写っているのだ。
「……この老体は、真の美しさを見抜く力があってね」
瞳を動かさずその生き物の方を観察する。黒塗れの服を纏ったその顔を見てみると、少し年老いた男性だった。幾つの辛い事が在ったのか解らない、深く刻まれた涙の線がつうと刻み込まれている。そんな悲しい様な暖かいような、不思議な顔だった。
「……さて、私がどうやって貴方の真の美しさを計るのかその方法を教えよう」
「貴方の顔をじっと見ればそれが解るんだ」
そんな調子の良い事を話したかと思えば、その老爺は私の顔に向かって、ぐいと自分の顔を近づけた。
それに驚いた私は目を動かしてしまいそうになる。「恥じる」という感情を私は覚えた。
こらえて、老爺の方を見るとじっと私の瞳を見つめていた。

彼は深く蒼い瞳で私をじっと見つめる。
……黙っていればいいだろう。
……黙っていればこの老爺もすぐ私を見限り帰路に就くだろう。
老人は私を見つめている。
早く、離れたほうがこの人の為だろう。周囲の目もゴミに奇麗な格好をした男性が顔を近づけていると怪訝な顔で覗き見るだろう。
……醜いだろう。私の顔を見るだけでも気分は落ち込み日は沈むだろう。おまけに私の身体にこびり付いた残飯の臭いが鼻を刺すだろう。通りがかった汚い鼠がその奇麗な靴を我が物顔で踏み荒らすだろう。真っ黒なコートに生ゴミから生まれた蠅がついてしまうだろう。
だけれども、それらにはまったく文字通り目もくれず、彼はこちらの瞳を見つめている。

「……離れて、下さい」
たまらず、しばらくして私が音を上げた。それは久しぶりの命の芽吹きだった。
だが、その声は酷くノイズが罹ったように聞き取り辛く、無様だった。
「……なぜ?」
老爺は案外に耳がよく、蛙の鳴き声の様な私の声を捉え質問した。
「私は……」
「貴方が嫌いだから」と、嘘をつけばこの老爺は私を見捨ててくれるだろうか、私を蔑んで掴んでいるその手を放しどこかへ行ってしまうのだろうか。
正直に私の身の上話を言うつもりは無かった。
だが、この老爺の手から、私の鉄の身体に伝わっているであろう温もりを失うことは考えたくなかった。
だから正直に話した。

「私は……汚いから」
目から醜くったらしく黒い液体を流す汚い人形それが私。
「汚いんですよ、私……！　臭うし、汚いし……！」
主人に殴られ、カラスに食われ、ネズミに貪られる。それが私の往き付く先。
「おまけに見た目も醜くって……！　本当に……！　愚図です……私！」
夢を見ることもできずに、蜿蜒と夜の闇と月の明かりをさまようそれが私。
「私、自慢できるものな何一つないんです……！　それは私が……！」

「……グズだからなんかじゃない!!」
老爺が叫んだ時、雨は止まった。そして、二人の時間が始まった。

「君は、醜くも、汚くもない。私は医者でね、君には治療が必要だ。これから毎日。温かいご飯と白い布団でぐっすりと寝る治療だ」
「この職業はプライド抜きではやってられない職業でね、君は絶対治すだから今は私の家に来なさい」
そう老爺が言うと私は両の手で大切そうに持ち上げられる。

それが始まりだった。

壊れた時計

公道から外れるように家に向かうので人目には付きにくい。と、彼は話していたがしかしどうしても人という物にはすれ違う。それは仕方のない事だと言い聞かせて私は目を瞑った。

彼はそんな私を見て、気になるかい？　と、声をかけ私に上着のコートを被せる。

温もりを感じれない私の肌だが、心はどこか暖かかった。

服に付いていた、ゆったりとした香りは私にもう一度だけ誰かを信じる強さを育み、神が与えたこれが最後の機会だと思わせた。

「ごめんね、あんな場所に居たんだ久しく町の風景を見たかったろうに」

そんな事は無かった、むしろこの季節にコートを脱いで彼は寒かったのではないかという事が気がかりだった。

「……着いたよ、私の家だ」

被っていたコートを下げて、少し古びた建物の扉を開けると少し埃っぽい空気が顔を覆う。入るなり一目早く着いたのは工具と機械の部品が小綺麗に並んでいる大きな作業台だった。それは恐らくここで「何か」を修理していたのだろう。

「お医者さん……？」

私が少し首を傾げ老爺に問う。

彼は私の問いにゆっくりと答えた。そしてその声は先ほどより更にゆったりと優しくなっていた。

「ああ、私は機械人形専用のお医者さん」

そう話すと一目散に私をふかふかのベットに寝かせ、隣に椅子を引き様子を聞いてきた。ひび割れてしまっている瞳は動作しているのか？　私が気付いている中で何か不調は無いのか？

……彼の靴と服は汚い私を抱いてここに来てしまったので、大分汚れてしまっているが、恐らくそれよりも私の事を優先して考えてくれたのだろう。しばらくすると服の事に視線で気付いてしまったらし

く手を頭にやってこう言った。
「すまないね、若い女性と話す格好じゃなかったみたいだ」
「……すみません、私のせいで貴方まで汚れてしまった」
と、私が謝ると彼はさっきまでの暖かな顔を辞め、悲しそうな瞳をして私の頬を撫でた。
「……あまり趣味の良い部屋ではないが、少し待っててね」
彼が椅子から離れた後、私は彼の悲しい目をもう見たくないと強く思い、そしてその目にさせてしまった事を後悔した。
少し楽にする溜息を一つついて私は彼が先ほど言っていた「あまり趣味の良い部屋ではない」という言葉が気にかかり、辺りを見回す。
確かに先ほどの作業台をよく見ると私達機械人形の目だったり指先だったりの作りかけのパーツが転がっている。壁にも同じように作りかけの機械人形の手足がぶら下がってしまっているが、しかし何となく嫌悪感を感じないのは、この部屋の雰囲気が奇麗に纏まっているからだろう。
部屋はその人の心情が出るというがその通りで、この部屋は少し暗く埃っぽいがそれよりも暖かな光が差しその光が様々な家具や置物を魅力的に照らし不思議と安らぎを感じる。そんな部屋だった。
……だけれども。
「私はどうなるのだろうか」
一言、誰も居ない部屋でつぶやいてみる。
少し不安だった。彼はとてもやさしそうに私に接してくれるが、私が少し目を瞑ると私の顔を殴るご主人の顔が浮かんできて手が震える。
人が苦手だった。
「ごめんね、遅くなった」
だけど今、私の事を気にかけてくれる彼は、暖かかった。
この事は誰かに話したかったかもしれない。誰かにぶちまけたかったのかもしれない。その相手は誰でも良かったのかもしれない。でも、それでもと思い余って私身の上話を只々彼につらつらと話してしまった。

私の声はカエルの様に濁音だらけで、体は震えていて、汚らしい身なりだったが、彼は黙って急にすべてを話しだした私を黙って聞いていた。震える手を取って、たまに頭をなでて「頑張ったね」と呟いて、瞳をじっと見て、聞いていた。

「君は酷い事をその「ご主人様」にされた。しかし君はそれでもなりたいものがあるんだね」

自分の事全てを話した上で老爺が確認するように壊れた機械人形に聞くと彼女は答えた。

「……はい、……私は人間になりたい」

そうか、と老爺は言い体勢を少し楽にした。

天井を仰ぎ見て何か懐かしそうな顔をして、自分に笑った。

「君の願いを叶える唯一の方法がある。それは「心」を持つことだ」

「……ココロ？　……人が比喩で指す自分の感情の事ですか？」

彼が話すことは私に希望を与えた。だけれども反対に彼にとっては苦い話の様子らしい。

「……「心」。人になりたい機械人形が往き付く最後のお話。それはこの世に一つしかない伝説のパーツさ。存在するかもわからない夢の話」

「……私には竹馬の友が居た、君と同じ機械人形だ。彼の願いは君と同じく、人間になる事だった」

機械人形の少女の話を聞いて何かを思い出した老爺は時久しく自分の事を語った。

「理由は愛する人のために……だったかな。彼は必死になって機械人形至高のパーツとされる「心」を探した。馬鹿みたいに研究して、我武者羅に自分の道を貫いて、そしてついに彼は「心」を手に入れた」

「……だけどもね。そんなものを探している間に最愛の人は年老いてしばらくして死んでしまったよ。……結局、死んだ彼女は最後まで人間で、彼は「心」を手に入れても最後まで粗悪な機械だったんだ。……馬鹿な話だよ、全く」

彼はそう短く話すと、さっきまでの私と同じように手を震わせていた。

その様子は、とても悲しそうで寂しそうで、哀れみを誘い。……そして、私の疑いを確信にさせた。
「……それは貴方の」
「……そうだね、馬鹿な機械人形の話さ」
そう、自分に戒めるように話した老爺は蒼い目を少々潤わせた。
しかしそんな自分に酔い、慎み、後悔を繰り返してきた老爺に取ってはもうそんなものは慣れていた。
それを見て老爺の時間はもう決してこれから動く事は無いのだと、目の前に居る壊れた機械人形は理解した。
だが、それでも老爺を卑下したりする事などは機械人形には出来なかった。
むしろ老爺の支えになってあげるのだと、彼の笑顔を見たくなった。
彼女は明らかに他の凡庸な傀儡などは絶対に所持していない「何か」を手に入れかけていた。
老爺の目の前に居る壊れた機械人形、後のメイ・ヘヴンは「心」を持ちかけていた。
メイの時間が動き出した。

2人の仕事

「どうやら腕のシリンダーが問題の様です。様子を見てみますね」
季節感の無い着衣をした技師がそういって機械人形の腕を開く。
それを見守る羊飼いの男は、心配そうに口に手をやってじっと見ていた。
羊飼いは恐らくこういった事に慣れていないのだろう。
技師が手慣れた手つきで人形の腕を修理していく様子をまるで人間の大手術を生で見ているように、萎縮していた。
「大丈夫ですよ。怖い顔しないで」
そう技師が話すと羊飼いは冷たい息を吐いた。
「ロセフ先生。そうは言っても緊張しますよ、彼は私の大切な仕事の友ですから」
勿論、羊飼いの男にとってその修理中の人形は仕事の都合という関係もあるが、大切な近しい「人」でもあった。彼が子供の時から一緒に居た人形だからだ。
「……痛くないか？」
羊飼いが自分の人形に問いかける。
人形は無言だが男の方をじっと見てもう片方の手で相手の頭をポンと三回軽く触った。
男はその人形の手を取ってそうかそうか。と、満足したように安堵の息を吐く。
二人の仲は信頼と言う紐で結ばれている。
その様子を見た機械人形専門の技師ロセフはそう判断した。
そしてロセフもまた、信頼と言う紐を結び合った信頼できるパートナーが居た。
「……ちょっとネジ穴が歪んでいるみたいだ。……メイ！　すまないが、私の車から２２番の工具を！」
ロセフが、キッチンへお茶とお菓子を入れにと行った自分の助手をしている機械人形を呼び戻す。
残った二人が声の掛けられた方に顔を向けると、しっとりとした声

が聞こえた。
「はい、今すぐ！」
実った小麦の様に美しい金色の髪を結い、肌はつやのある白い絹の様。目はロセフと同じ青色で健やかな心を写していた。何処までも伸ばせるすらりとした脚が少し足早に交差する。
間をおいて羊飼いの男が少し鼻の下を伸ばしこう言った。
「……奇麗な声の娘さんですねぇ」
それを見たロセフは動かしている手を止めもせず、先までと同じく淡々と話す。
「ええ、そうでしょう。機械人形の声は元となる喉の調整が非常に難しい。理想の声にするために音声機を付ける人も居るくらいだが彼女の声は自前のものだ、それであのような声が出せるのは中々に素晴らしいと……」
「……失礼」
顔をを上げると羊飼いの、いつの間にかなっていたらしいにやけ面をみてロセフは黙ったが、もう遅かった。

……仕事帰りの道中。ビンテージ車に乗った人形と人間の二人が静かに笑い、静かに認め合う。
それは、まるで娘と父親の織り成す他愛のない幸せの空間だった。
「彼はメイの事が気になってたみたいだ、どうだね彼が子供だった頃からの付き合いだが切実な人だよ」
開口一番、全く心にも思っていない事をロセフは話した。ロセフはメイの事をびくとした程度では誰かにやるつもりはないと誓っているが、彼女の心を少し惑わす算段……というよりも愛ゆえに揶揄いたかったのだ。
「……素敵な人でしたね」
「！」
ロセフは落ち着いた態度を取り計らっているが、それは間違いであることは車のハンドル捌きが教えてくれた。それを見たメイは微笑を見せ真意を明らかにする。

「……うそ。ロセフに恩を返すまでは誰かに仕えることは在りません」
それを聞いたロセフは安堵のため息とは裏腹に、少し曇ってしまっていた。
メイのその言葉はロセフにとっては嬉しい反面、悲しい話だったのだ。
もう彼女には自分の恩義など感じず、幸せに只々笑っていてほしかったからである。
自分があのゴミ捨て場でメイを拾った時から、メイの新しい体を作った時から、メイの感情が双葉の様に芽生え始めた時から、ロセフは彼女の未来だけを見つめていた。
「メイ。君が来て私は十分笑顔になった、君は恩義など微塵も感じる必要はない」
あのゴミ屑まみれの地獄から、ネズミに話しかけ涙を流す機械人形を連れ出した時に、何を捨てても、自分の命に代えても「それ」を守ると心に誓った。
「……だから、君が仕える人は君が探すんだ他の誰でもない、君がね」
色恋などは毛頭なく、ただ純粋にロセフは全てを掛けてメイを愛していた。
「……なら言葉を変えます。私は私の意思でロセフと一緒に居ます」
「……この仕事は辛くはないか?」
ロセフはついつい話を足早にしてしまった。間髪入れずにメイは答える。
「はい。最高の仕事です」
……家に帰るなり二人は早速、溜まっている案件に取り掛かる事にした。
知っての通り、ロセフの仕事は機械人形修理専門の技師である。
その仕事の実情は人に必要とされながらも、同じく人から疎まれる職業だ。

人々と運命を共にしている様々な機械人形たちの緊急事態を、時には車で駆け付け、時には整備し、時には必要な部品を発注し。そして時には欠けた一部を作り直す。
言葉にすれば単純なものだが、その仕事に準ずるものはごく僅かで、重宝される。
なぜなら、この仕事は人を必要としながらも、じわりじわりとその真摯な心を蝕まれていくからだ。
「……すまない、Ａ４６を」
……それは、人と暮らす、人と寄り添う、人のエゴを全て無条件に呑みこむしかない傀儡達に真正面から向き合う仕事。
「ロセフ、Ｄ１２番のレンチを」
……それは、人の光を見ることもできるが、それ以上の闇を垣間見ることもできる暗い谷。
「メイ。８番の子、足完成。様子見て」
……並みの精神では、３年と持たない人の闇。だけれども彼らはそんな哀れな傀儡達に寄り添う変わり種。
「異常なし。……同じく５番も異常なし」
……百の汚れから真珠の様な眩い一を見つける事を生き甲斐にした屈強な者の集まり。
「ラストスパートですよ、ロセフ」
「全く、良い腕だよメイ」
それが機械人形の「技師」という仕事。

「……寒がりの癖に、毛布が薄いですよ」
メイが激務からの疲れで寝ている相方に優しく布を掛ける。
手に持ったホットコーヒーに口を付け、椅子にもたれてロセフの寝顔をじっと見ていた。

外はいつの間にか、しとしと冷たい雨が降っている。
その様子をメイは懐かしそうに、寝ているロセフと一緒に目に写す。
「……貴方が、あのゴミ溜めから私を見つけてくれた時、私は初めて照れたんです」
己を本当に何の価値もないそこらに散らばっているごみ屑と一緒だと思っていた自分。
そこから救い出してくれた、唯一の暖かい瞳。
突き刺さる視線に自分は欠片も悪くもないのに、申し訳なさそうに接してくれた甘い香り。
喚き散らかす醜い人形を見ても黙って手を握って、優しくうなずいてくれた唯一の人。
「……私が照れた時は、今でもその時しかないです」
相手が例え「時が止まった人間」と理解しても尚、メイは――――
「……私には、貴方しかいないから」

コーヒーの入っていたカップはいつの間にか空になり、雨も止んだ。
外は何時しか朧気に光が差している。轢かれた香ばしい匂いを残しメイは仕事に戻った。
メイの掛けてあげた毛布が少しだけ動いた気がした。

「メイ、僕はベーカー街５８番地へ行ってくる。君は来なくていい」
……突然メイを突き放したような言葉遣いになったロセフだったがそれには理由があった。
ベーカー街は治安がとても悪く、女性の形をしているなら機械人形

と言えど警戒せねばならないからだ。
そして何より、そのような街の住人から依頼が来たとなると大抵碌な仕事の話ではない。
「……いえ、行きます」
この仕事の話も例に洩れなかった。
何故なら、この仕事の雇い主は今まで何度もロセフたち機械技師を呼びつけているからだ。
ベーカー街５８番地左隣の住居、バーン家。そしてその注文は何時も決まっていて女性型人形の顔の修復だった。
「……メイ、無理をしてはいけないよ」
「……あの子の様子を見に行くだけですから」
なぜそんな律儀に、その様な依頼を受け続けているのかと聞かれると、ロセフ達はそのバーン家の機械人形「アルジェ」をどうにか引き取ろうと模索していたからだ。
彼女はいつも横暴なバーンの奴隷となっていても、健気にいつも玄関の花瓶を差し替える心優しい人形だった。
そんな彼女をメイとロセフが何もせず放っておけるわけがなかった。例え安い賃金でも仕事を受け負い、アルジェの優しい心が暴力に塗りつぶされないように会いに行きながらも、何とかして彼女を救う方法を考えていたのである。
それが例え偽善であっても、二人は彼女のために心を決めていた。
「ロセフ、何故声の出せない機械人形を大切にする人も居れば、あんなに素直なアルジェを虐める人も居るのでしょうか？」
ロセフは、その素直な問いかけに上手く答える事が出来なかった。

蒲公英の一夏

「……やあ、メイ。調子はどうだい？」
糸目で、猫背で、背が高く、長い髪と渋い声。
メイは彼、バーン・ポートマンの全てが嫌いだった。
「三か月ぶりですね。彼女は、アルジェは何処でしょうか？　技師ロセフが直ぐに治して見せますので」
ロセフには絶対にしない冷たい目で、だけれども感情を変えない声色で彼を見た。
静かにはしているがメイはこの家の広い部屋や、小綺麗な装飾品に少し埃の混じった匂いなども憎たらしくなるほどの嫌悪感を覚えていた。
「……やあバーン君。呼ばれてやってきたよ。また壊したそうだね？」
ロセフはメイの少し細くなった目と話を遮るように何時もの調子で語り掛けた。
それに頭に手を置きバーンはお道化た様に言葉を返す。
「また壊〝れた〟ですよロセフさん。階段から誤って滑り落ちたんです。人形でよかった。人なら死んでいる」
冗談交じりにつまらないジョークを軽々と舌から奏でるバーンだった。
バーンに簡単な問診を聞き、ベットで横になっているというアルジェの状態を二人が確認しようとしたときの事だった。
……空気に混じった機械人形のオイルの臭いが鼻を突いた。
「アルジェ……！」
「……あ、メイ！　話が聞こえたから」
そう言って、扉の隙間から顔をひょっこり出したアルジェは、破損部が見えないよう顔の半分に布切れを巻いていた。
布にはオイルが浸み込んで人形と言えど痛々しい。よろよろと精一杯小さな歩幅で歩いてきた。
アルジェはメイと同じ機械人形であるが、見た目にはメイから見て

年の離れた小さい妹ほどある様に見える、それはアルジェがその様にかたどった人形、幼人形だからであった。
　足取りがおぼつかないアルジェが足元に向かってくるなり、メイはいきなり感極まって抱きしめた。
「……大丈夫？　いじめられたの……？」
「……う……ううん。……いじめられてないよ？」
　抱きしめられながら何もしないバーンの手元を見てアルジェはメイの服をぎゅっと握りしめて少し泣きそうな顔で否定する。
　布が当てられている破損個所が故意のものかどうかは殆どはっきりしていた。
「バーンさん。何度も言うが幼人形とは主に子供のいない家庭などに準じた機械人形です。小さい分壊れやすい。大切に扱ってください よ」
　そして、メイを助けたロセフがそれを許せる訳が無かった。
　幾十度、バーンにこの言葉を使っても1つとて感情を殺せはしなかった。
「……なら早くベットへ向かいましょう。ああ、オイルが床に零れてしまった」
「……ひっ!?」
　抱きしめられていたアルジェの顔が一気に青ざめた。メイから離れて狂ったように頭を下げ続ける。
「……ごめんなさい！　……ごめんなさい！　後で拭いておきます……!!　……ごめんなさい！」
　ひたすらメイの抑止の声も聞かず、ひたすら謝り続ける。
「……ごべんなさい！　……ごべんな〝さい！」
　……アルジェが謝れば謝るほどメイとロセフの腸（はらわた）は静かに、怒りで燃えていた。

「……ふむ、少し悪いです」

アルジェの顔の傷を診ながらロセフは大きく呟いた。
「……また、そちらでこの子を預かるつもりですかな？」
「はい。今回は三週間は必要です」
バーンの問いをロセフは、まるで当たり前の様に言葉にする。
無論、嘘である。本当なら顔の損傷を治すだけなら、今ある手持ちの修理用具で事足りる。しかしバーンの場合はこの傷だけで1週間は取る。
少しでもロセフの家にアルジェを匿って自分たちで出来る限りの心の安らぎを与えるためだ。
しかし今回は三倍の時間を取った、勿論アルジェを休ませるためもある。だが、今回は少しだけ勝手が違った。
「……三週間。……ほう、随分と長いですなぁ……」
バーンはにやりと嫌な笑みを浮かべ少し貯めて。
「……いいでしょう。……しかし疑問だ、本当にそれだけかかりますかな？　別の技師に見せてみるのもありでしょうか……？」
メイは心臓を鷲掴みされたような気持ちを覚えた。
……が、顔には決して出さなかった。何故ならバーンはロセフの方を見ながらも、こちらの様子までまるで獲物を食らおうとする大蛇の様に僅かな隙一つ見逃さない。
そんな事まで思わせる程、狡猾な男を目の前にしているからだ。
「……どこに行っても同じですよ、今回は度重なる衝撃で感覚機器が狂っている。あれでは碌に歩けないよ、破損するのは珍しいパーツなので少ないし他の所だと、仕入れに倍は掛かる」
その大蛇にロセフが言ったのは大嘘だ。感覚機器というのは重要な部品ではあるが希少な部品では決してない。
敏感な空気は確実に変わっていた。
……。
……嫌な間だった。
「……ふっ、良いでしょう。確かに、アルジェの足取りは覚束無い。そして貴方達より良い職人は他にない。人形技師も限られている。……信じましょう」

「……醜悪な人です」
「メイ。まだ車は走り出したばかりだ。あの男ならこのくらいの距離でも聞こえるやもしれん」
赤茶色のヴィンテージ車を走らせ。二人は口々にバーンを罵った。

「ロセフ、アルジェの件はどうなっていますか？」
メイは何時もしている真面目な顔をさらに精錬にして、ロセフに聞く。
……このままではアルジェは近いうちに壊されてしまう、その前に何とかしなければ。と、メイがそう心から叫んでいるように見えた。
「……前にも言ったが世界の機械人形の扱いという物は例えるなら、家具と猫を足したようなものだ。他人が勝手に盗めば捕まるし、所有者も行き過ぎた躾を加えればそれもまた罪になる。誰かがそれを告発すればね」
「だが、猫と違い機械人形は言葉を話せる。つまりこの場合、傷跡などの証拠はある。が、本人の証言が無ければ……」
ロセフも歯がゆい思いをしていた。アルジェを説いても彼女はバーンの悪行を決して話そうとしないのである。彼女はバーンに見捨てられない様に必死だったのだ。
しかし、これ以上の話をするとなると、どうしてもアルジェには、バーン家での生活を捨ててもらうしかない。だから自分たちが家族になって彼女の呪縛を解き放とうと躍起になっていたのだ。
だがしかし、それでは恐らく遅すぎる。このままではアルジェが壊されてしまう方が先になるだろう。と、今回の件ではロセフもそう思わざる得なかった。
……メイの顔は曇ってしまった。
「……ロセフは何もしないんですか？」

率直な疑問だったがその言葉は鋭利な刃物だった。
しかしそれを聞いても、表情も変えずにロセフは淡々と自分の想いを語る。
「……必死で考えてるさ。あの子は僕にとっても救いたい「命」だ」
恐らくロセフもバーンの件で少しナーバスになっていたのかもしれない。メイが思うような答えはこの場で出せなかった。
「……ロセフ、私達に機械人形に芽生える、この感情はなんですか？」
「……感情とは何か。……それは僕の見解かい？　一般的な話かい？」
むっとしてメイは答えた。
「じゃあ、両方です」
「……手短に言うと「解らない」よ」
僅かに細くなったメイの視線がロセフに突き刺さる。
「だがしかし人間と機械人形は様々な形はあれど寄り添い合っている。これは地球が生まれた奇跡と同じくらい尊い物と僕は思う」
「……僕は人間だ、そうなった。でも唯一変わらないものがある。それは「感情」だ」
気が付くとロセフは昔に見せた悲しい瞳になっていた。
メイはそれを見て、また何時かの様に後悔した。

―パジルトン街　大きな庭園にて―

アルジェのためメイはベーカー街から離れた庭園に来ていた。
美しい花々が咲く大庭にアルジェは人の子供の様にはしゃいでいたが、彼女が指さした花は庭園の主役である見目麗しい華ではなく、何故かその下にある地面を見てはしゃぐ。
「……うわぁ！　メイ！　きれいなお花！」
「……アルジェは趣味がいいわね、これはタンポポ。私も好きな花よ」
風に揺らぐ黄色い花、タンポポなどは何処にでも生えている雑草だったが、アルジェは珍しそうにしている。
そこに疑問を感じたメイは、少しだけアルジェに答えを求めた。

「アルジェ、この花は初めて見たの？」
「うん！　庭園には来たことが無かったから！」
　庭園には様々な花が植えてあったが、アルジェは雑草であるタンポポを珍しがっていた。
　恐らく花の咲く場所にすら連れられていなかった事が伺える。
　今と比べ娯楽が極端に少なく、街路に花が咲いていない時代はこう言った場所でしか花は見れなかったがだからこそ、バーンに、親に仕えてから今までで花の咲き誇る場所に行ったことが無いというのは、相当に悲しいものだった。
「……タンポポはね、大きくなると一つ一つが小さくなって、そして丸くなって、風に乗って飛んで行くの……アルジェは飛んで行きたいと思ったことはある？　私はあるよ？　昔、強くお願いした時があるのだけど……」
「……ううん。……私はない」
　辛い顔をしてアルジェは首を横に振った。
「……そっか、アルジェは偉いね」
　見ている方も辛くなる仕草にメイは、深く悲しみを覚えた。

　どこまでも青い空に美しい花々があるというのにメイの顔は曇っていた。
　仕方ないとはいえ、それは空気でアルジェに伝わってしまっていたのかもしれない。
　……彼女を救うにはどうすればいいのか？　もしかしたら自分のやっている事は正しい事なのか？
　そんな、見え切っている疑問まで抱くようになった。
　完璧な人間等無い様に、また完璧な機械などは居ないのである。
「……メイ！　見て見て！　タンポポの町見つけたの！」
　見かねたのか、ただの偶然か、アルジェが急に大きな声ではしゃぎだす。メイはアルジェの声を聴き、暗い顔を何とか日陰ほどに持ち直し、彼女の方を見て答えた。
「……タンポポの町？」

アルジェの元へ向かうと庭園の奇麗な花々たちの遥か右下にある少し雑草が生い茂った場所を指さした。疑問に思ったメイがそこにしゃがみ二人で生い茂る雑草を払いのけると。

「……そうねタンポポの……町ね」

陰鬱だった顔のメイがくすと笑った。そこには鮮やかな黄色とふわりとした白のタンポポが一面に咲いていた。白と黄色だけではない。一部が飛んで行ったものや小さいもの、大きいもの、少しくすんだ色のもの。様々なタンポポが草葉の陰に隠れて、まるでそこにひっそりと暮らしているような光景だった。

「メイ！　タンポポの町！」

「ええ、そうね」

笑顔になったメイを見てアルジェも笑う。

タンポポはもうすぐ飛び去る予定だったらしく、二人の僅かな息遣いに乗って黄色い花を残し、鮮やかに空に舞う。一つ一つが細かく分かれて親だった茎から旅立っていく。

その様子は淡く奇麗で、笑いあう二人が中心に居て、何というか……神秘的だった。

ほんの少しの白い雪が空に舞う中、思い出したようにアルジェはメイに聞いた。

「……ねぇ、メイは今でもタンポポになりたいと思う？」

「……思わないわ、今は人になりたいと思ってる」

「……メイ。それは、人形を虐めるため？」

「いいえ。今は人形と、人と、笑顔になる為に」

「……そうなんだ」

「……私もそんな「夢」持ってもいい？」

……そして、アルジェがメイに重い口調で語り掛けた。

「……さっきはごめん。私ね、昔のメイと同じで、タンポポになりたいって思った時があるの」

されども、枯れゆく華は美しい

「……以上だ。バーン君。アルジェは本人の希望によりこちらが引き取る事になるのでどうかご心配なく」

屋根と窓に雨が打ち付ける。苦い光が印象的な部屋でメイとアルジェを後ろに置き、ロセフはバーンに宣言した。両脇には事情を全て話した知り合いの警官二人がバーンを睨んでいる。

今まさにバーンの悪事は暴かれ、彼の罪を償う時という、そんなアルジェの決意あってこその重要な背景だ。

何故、警官達だけに任せずあえてバーンとの最後の話し合いを試みたのはアルジェの一声だった。

今までお世話になったお礼が言いたい。

……もう二度と会えなくなるであろうバーンにも慈悲を忘れず感謝の言葉を述べる彼女らしい選択だった。

「……バーンさん。最後に何か言う事は？」

「……」

錠をかける警官がバーンに問うが、バーンは何も言わず、まるで何時ものディナーのひと時の様に落ち着いていて、この際追い詰められた人間によく見られる取り乱した様子などからは遠くかけ離れていた。

「……最後に本人の希望により、アルジェから一言話があるよ、バーン君。よく聞きたまえ」

ロセフがそう言うと、俯いたアルジェがメイに庇われるように机越しに話しかけた。

バーンはその様子を、屈辱も恥辱も感じさせない涼しい顔で、冷ややかにアルジェを見て。

その後に、メイを見た。

「……あの、バーン様は……」

「……メイ。アルジェの話を聞いた時どう思いましたか？」

アルジェの話を遮りバーンはメイに問う。疑問符が皆頭に浮かんだが、次の言葉にその場にいる全員が凍り付いた。

「メイ。君は私が見たどんな機械人形よりも人間らしい。私の為に聞かせておくれ」
アルジェは最後の言葉も言えず泣き出しそうな顔になっていた。ロセフは拳を強く握り震えるほどの怒りを覚えた。警官たちは戸惑い、そして皆、真の暗やみの一つを垣間見た。
だが、この場の中で最も心に強い怒りを覚えたのは他の誰でもないメイ・ヘヴンだった。
「……貴方は！　自分の子が……！　慈悲の言葉も聞いてやれないのか……！」
あんなにこのろくでなしを気にしていたアルジェ。
固く口を結びこの男の手の汚れを気にしていた小さい魂。
小さい体に罰を受けても一人で抱え込んでいた優しい幼人形。
……黙っていられるはずがなかった。
その怒りはメイの足を動かし、バーンの元へ駆け寄り頬を強く叩いた。
ロセフも初めて見たメイの顔は相手を真に軽蔑した目をしており、同時に怒りのあまり自分も涙していた。その様子は悔しいがバーンの言う通り、操り人形の様な無感情とは違う何かを感じさせた。
……静まりかえった空気の中、警官たちは静かに頬の赤くなったバーンの両手を錠で繋ぐ準備に取り掛かる。すると、今まさに罪を受けるべき者が何食わぬ顔で語った。
「……くくっ、メイ。人形は自分で整備を覚えれば自身で体も直せるし、人より頑丈だ。そして何より人と何ら変わらない心を携えている。機械人形は人よりも高いレベルの「生物」と、云い得るだろう」
錠が付けられて、もうじき罪人となるのにバーンの口は減る事を知らない。それどころか饒舌にへらへらと笑いながら靴の音を鳴らし、警官達がまるで、居ないものかの様に独りでに道を外れて歩き始めた。
「そして私は人形と人が寄り添いあう奇跡的な世界などは必要ない……と思っていてね」
制止も聞かず。歩き始めたバーンに皆、警官すらもあっけにとられ

た。勿論、怒号と共に両脇を固められ動けないようにされたのだが、それでもバーンは何事もなかったかのように自論を進める。
「……というよりも、近い内このバランスは崩壊すると思っているのさ」
両腕を掴まれ手首には枷がはめられ、皆に咎められても、バーンはまるで何も心に掛けず。アルジェすらも見ようとせず只々メイに話しかける。その様子は歪だった。だがその歪みを更に丸めてくしゃくしゃにするようにバーンは笑い。自分の罪など全く興味が無いように短い話を終えた。
「……話し過ぎたよ。」
誰もが一言も声を出さない。出せなかった。「いずれ人類が機械に淘汰される時代が来る」バーンが言う事は誰しもが、この時代だからこそ考える正論と思わしきものだったからだ。
……そう。さらに付け加えるなら、誰もが声を出せなかったのではない。
誰もが、今バーンが語った事は一つの正しい未来だと思わせたのだ。この場の一人以外は。
……そしてバーンは最後に、まるで神のように命の宣告を告げた。
「……さようなら、アルジェ」
……その言葉を発した直後、バーン家からまるで雷が庭に落ちたような轟音が響き渡った。